

Oracle® Database

Companion CD インストール・ガイド
10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (x64)
部品番号 : B25693-02

2008 年 9 月

Oracle Database Companion CD インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows (x64)

部品番号: B25693-02

Oracle Database Companion CD Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Microsoft Windows (x64)

原本部品番号: B15686-02

原著者: Reema Khosla

原協力者: Patricia Huey, Sanket Atal, Warren Briese, Sudip Datta, Jack Duan, James Emmonds, Joel Kallman, Pushkar Kapasi, Michael Hichwa, Joel Kallman, Pushkar Kapasi, Sergio Leunissen, Steve Mayer, Matthew McKerley, Alex Keh, Santhana Natarajan, Kristopher Rice, Janelle Simmons, Jason Straub, Martin Widjaja

Copyright © 2008, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vii
表記規則	vii
サポートおよびサービス	viii
Windows Vista および Windows Server 2008 のサポート	ix
Windows Vista および Windows Server 2008 のユーザー アカウント制御を使用した ユーザー・アカウントの管理	x
1 Oracle Database Companion CD インストールの概要	
インストール・プロセスの概要	1-2
Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品	1-3
Oracle JDBC Development Drivers	1-3
Oracle SQLJ	1-3
Oracle Database のサンプル	1-4
必須製品	1-4
Oracle Text が提供するナレッジ・ベース	1-4
Oracle Ultra Search	1-4
ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ	1-4
JPublisher	1-5
2 Oracle Database Companion CD の要件	
Oracle Database 10g Products の要件	2-2
ディスク領域要件	2-2
ブラウザの要件	2-2
Oracle Database の要件	2-2
ハードウェアおよびソフトウェア要件	2-3
Windows Telnet サービスのサポート	2-3
Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート	2-3
ネットワークのトピック	2-4
DHCP コンピュータへのインストール	2-4
複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール	2-4
複数の別名を持つコンピュータへのインストール	2-5
ループバック・アダプタのインストール	2-5

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック	2-6
Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール	2-6
Windows Vista または Windows Server 2008 でのループバック・アダプタのインストール ...	2-8
ループバック・アダプタの削除	2-8

3 Oracle Database Companion CD ソフトウェアのインストール

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順	3-2
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-2
ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー	3-2
リモート DVD ドライブからのインストール	3-3
リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有	3-3
ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング	3-3
リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール	3-4
リモート・コンピュータでのハード・ドライブからのインストール	3-4
リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール	3-4
Oracle Database 10g Products のインストール	3-5
Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置	3-5
Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別	3-5
Oracle Database 10g Products のインストール手順	3-6
最新のパッチ・セットのインストール	3-7
Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除	3-8

4 Oracle Database Companion CD 製品の開始

インストール内容の確認	4-2
Oracle Ultra Search の開始	4-2

A レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール

レスポンス・ファイルの使用方法	A-2
サイレントまたは非対話モードを使用する理由	A-3
レスポンス・ファイルの一般的な使用手順	A-3
レスポンス・ファイルの準備	A-4
レスポンス・ファイル・テンプレートの編集	A-4
レスポンス・ファイルの記録	A-5
レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行	A-6

B Oracle Database Companion CD グローバリゼーション・サポートの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用	B-2
様々な言語による Oracle Universal Installer の実行	B-2
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	B-3
NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成	B-3

C Oracle Companion CD のポート番号の管理

ポートの管理	C-2
ポート番号とアクセス URL の表示	C-2
Oracle コンポーネントのポート番号とプロトコル	C-3
Oracle Ultra Search ポートの変更	C-3

D Oracle Database Companion CD のインストールに関するトラブルシューティング

要件の確認	D-2
インストール・セッションのログの確認	D-2
インストール失敗後のクリーン・アップ	D-2
サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理	D-3

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows (x64) に含まれている製品のインストールおよび構成方法について説明します。この製品でサポートされる Windows オペレーティング・システムは、Windows Server 2003、Windows XP、Windows Vista および Windows Server 2008 です。

次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)
- [サポートおよびサービス](#)

対象読者

『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』は、Oracle Database Companion CD for Microsoft Windows (x64) に含まれている次の製品のインストールを行うユーザーを対象としています。

- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- Oracle Database のサンプル
- JPublisher
- ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ
- Oracle Text が提供するナレッジ・ベース
- Oracle Ultra Search

このマニュアルを使用するにあたっては、Oracle Database がインストールされているコンピュータに対する管理者権限と、オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概要に関する知識が必要です。

関連項目： デフォルトの設定を使用してクイック・インストールを実行する場合は、『Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』を参照してください。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database リリース・ノート for Microsoft Windows (x64)』
- 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』
- 『Oracle Database Client インストール・ガイド for Microsoft Windows (x64)』
- 『Oracle Database 概要』

Oracle エラー・メッセージについては、Oracle Database エラー・メッセージを参照してください。Oracle のエラー・メッセージの説明は、HTML 形式でのみ提供されています。Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のオンライン・ドキュメント・ライブラリにアクセスすると、エラー・メッセージを範囲ごとに参照できます。特定の範囲を見つけたら、ブラウザのページの検索機能を使用して、目的のメッセージを検索します。インターネットに接続している場合は、Oracle オンライン・ドキュメントの Oracle メッセージ検索機能を使用して、目的のエラー・メッセージを検索できます。

このマニュアル内の多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/membership/index.html>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意：ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Windows Vista および Windows Server 2008 のサポート

Oracle Database は、リリース 10.2.0.4 を使用した場合、Windows Vista および Windows Server 2008 でサポートされます。10.2.0.4 メディア・パックおよび Oracle Technology Network の Web サイトから入手可能な Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.4.0) for Microsoft Windows Vista x64 and Microsoft Windows Server 2008 x64 のメディアを使用します。Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) for Microsoft Windows のメディアを使用して Windows Vista または Windows Server 2008 に Oracle Database をインストールしないでください。

注意： Oracle HTTP Server および Oracle Workflow は、Windows x64 オペレーティング・システムではサポートされません。

Windows Vista および Windows Server 2008 のユーザー アカウント 制御を使用したユーザー・アカウントの管理

コンピュータで、信頼できるアプリケーションのみが実行されるようにするため、Windows Vista にはユーザー アカウント制御が用意されています。このセキュリティ機能を有効にした場合、Oracle Database をインストールするとき、構成方法によって、同意または資格証明のいずれかを求めるプロンプトが Oracle Universal Installer に表示されます。必要に応じて、同意または Windows 管理者の資格証明のいずれかを指定します。

Database Configuration Assistant、Net Configuration Assistant および OPatch などの一部の Oracle ツール、または、Oracle ホーム内のいずれかのディレクトリに書き込むツールまたはアプリケーションを実行するには、管理者権限が必要です。ユーザー アカウント制御が有効な場合、ローカルの Administrator としてログインし、通常の方法でこれらのコマンドを実行できます。ただし、Administrator グループのメンバーとしてログインした場合は、Windows 管理者権限で、これらのタスクを明示的に起動する必要があります。

関連項目： 詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド for Microsoft Windows (x64)』の「Windows Vista および Windows Server 2008 でのデータベース・ツールの起動」を参照してください。

Windows の Administrator 権限で Windows ショートカットを実行する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニュー・ボタンをクリックします。
2. 「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」を選択します。
3. 実行するコマンドまたはアプリケーション名を右クリックし、「管理者として実行」を選択します。

Windows の Administrator 権限でコマンド・プロンプトを起動する手順は、次のとおりです。

1. デスクトップ上に、コマンド・プロンプト・ウィンドウ用のショートカットを作成します。ショートカット用アイコンがデスクトップに表示されます。
2. 新規作成したショートカット用アイコンを右クリックし、「管理者として実行」を指定します。

このウィンドウを開くと、タイトル・バーには「Administrator: コマンドプロンプト」と表示されます。このウィンドウ内から実行されるコマンドは、Administrator 権限で実行されます。

Oracle Database Companion CD インストールの概要

この章では、Oracle Database Companion CDに含まれている製品の概要と、各製品のインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

- [インストール・プロセスの概要](#)
- [Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品](#)

インストール・プロセスの概要

インストール・プロセスは、次の5段階で構成されます。

1. **リリース・ノートの参照:** インストールを開始する前に、Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) のリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、プラットフォーム固有のマニュアルとともに使用可能です。リリース・ノートの最新バージョンは、次の URL の Oracle Technology Network から入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/documentation>

2. **インストールの計画:** この章では、各インストール・タイプの製品と、ソフトウェアのインストール前に知っておく必要のある情報を提供します。

『Oracle Database インストレーション・ガイド』の付録 A 「インストールに関してよくある質問」も参照できます。この付録では、サイト要件に応じた Oracle 製品の最適のインストール方法が提案されています。

3. **システム要件の確認:** 第 2 章では、ソフトウェアをインストールする前にシステムで満たす必要がある最低要件について説明します。
4. **ソフトウェアのインストール:** 次の項を参照して、Oracle Database Companion CD の製品をインストールします。
 - 第 3 章では、Oracle Universal Installer を使用したソフトウェアのインストール方法について説明します。
 - 付録 A では、レスポンス・ファイルを使用したサイレントまたは非対話型モードでのインストールの実行方法について説明します。
 - B-2 ページの「異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用」では、Oracle Database Companion CD コンポーネントを別の言語でインストールおよび使用する方法について説明します。
 - 付録 D では、インストールのトラブルシューティングに関する情報を示します。
5. **Companion CD 製品の使用開始:** 次の項を参照して、Oracle Database Companion CD 製品の使用を開始します。
 - B-3 ページの「NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成」では、Oracle Database Companion CD のロケールおよびキャラクタ・セットの構成方法について説明します。
 - 付録 C では、ポート番号の確認および変更方法について説明します。

Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品

次の各製品は、Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールできます。

- [Oracle JDBC Development Drivers](#)
- [Oracle SQLJ](#)
- [Oracle Database のサンプル](#)
- [Oracle Text が提供するナレッジ・ベース](#)
- [Oracle Ultra Search](#)
- [ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ](#)
- [JPublisher](#)

注意：

- Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウでは、Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品の詳細リストが示されます。
 - Oracle Database では、現在、Legato Single Server Version (LSSV) をサポートしていません。バックアップおよびリカバリ・ツールの Oracle Database Recovery Manager (RMAN) が Oracle Database に統合されました。RMAN の詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。
-
-

Oracle JDBC Development Drivers

Oracle には、コードのデバッグおよび他のデプロイ計画に使用できる一連の JDBC ドライバが用意されています。これらのドライバは Oracle Database リリース 10.2.0.1 以上にアクセスできます。

関連項目：

- [Oracle JDBC ドライバおよび Oracle Call Interface の詳細は、Oracle Technology Network \(<http://www.oracle.com/technology/index.html>\) を参照してください。](#)
- 『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』

Oracle SQLJ

Oracle SQLJ によりアプリケーション・プログラマは Java 設計哲学と対応する方法で Java コードに SQL 操作を埋め込むことができます。SQLJ プログラムとは、埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムです。Oracle SQLJ では、事前定義されていない動的 SQL 操作をサポートする拡張機能が提供されています。その操作はリアルタイムで変更できます。動的 SQL 操作は、SQLJ アプリケーション内の JDBC コードまたは PL/SQL コードを介して使用することもできます。一般的なアプリケーションでは、動的 SQL よりも静的 SQL のほうが広く使用されています。SQLJ はトランスレータおよびランタイム・コンポーネントの両方で構成され、スムーズに開発環境に統合されます。

Oracle Database のサンプル

Oracle Database Examples には、Oracle Database の製品、オプションおよび機能の習得に使用できる多様な例と製品デモが含まれています。これらの例の多くは、Oracle Database にオプションでインストールできるサンプル・スキーマと連動するように設計されています。Oracle オンライン・ドキュメント・ライブラリにあるマニュアルの多くは、Oracle Database Examples で提供されるサンプル・プログラムおよびスクリプトを使用しています。

必須製品

Oracle Database Examples を使用するためには、Oracle Database にサンプル・スキーマをインストールする必要があります。データベースの作成時にサンプル・スキーマを組み込むかどうかは、Oracle Database をインストールするとき、または Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して新規データベースを作成するときに選択できます。また、サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールすることもできます。

関連項目： サンプル・スキーマを既存のデータベースに手動でインストールする方法は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

Oracle Text が提供するナレッジ・ベース

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプでは、2つの Oracle Text ナレッジ・ベース（英語とフランス語）がインストールされます。提供されるナレッジ・ベースは、要件に応じて拡張できます。あるいは、英語とフランス語以外の言語で独自のナレッジ・ベースを作成できます。

関連項目： ナレッジ・ベースの作成および拡張の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。

Oracle Ultra Search

また、様々な種類の検索アプリケーションを作成できます。Oracle Ultra Search を使用すると、Web サイト、データベース表、ファイル、メーリング・リスト、Oracle Application Server のポータルおよびユーザー定義のデータソースを索引付けおよび検索できます。

ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ

Oracle Database 10g Products インストール・タイプでは、JAccelerator および Oracle *interMedia* Image Accelerator がインストールされます。これには、Oracle JVM および Oracle *interMedia* 用のネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP) が含まれています。プラットフォーム上でこの2つの製品のパフォーマンスを改善するには、これらのライブラリが必要です。

JPublisher

JPublisher は Java ユーティリティであり、Java プログラム内で次のユーザー定義データベース・エンティティを表す Java クラスを生成します。

- SQL オブジェクト型
- オブジェクト参照型 (REF 型)
- SQL コレクション型 (VARRAY 型または NESTED TABLE 型)
- PL/SQL パッケージ
- サーバー・サイド Java クラス
- SQL 問合せおよび DML 文

JPublisher を使用すると、SQL オブジェクト型、オブジェクト参照型およびコレクション型 (VARRAY またはネストした表) から Java クラスへのマッピングを強い型指定で指定し、カスタマイズできます。

また、JPublisher で PL/SQL パッケージ用のクラスも生成できます。これらのクラスは、PL/SQL パッケージ内でストアド・プロシージャを起動するためのラッパー・メソッドを持ちます。

さらに、JPublisher により Java から PL/SQL のみの型へのアクセスが単純化されます。PL/SQL の型と SQL の型の間で事前定義済マッピングまたはユーザー定義マッピングを使用したり、これらの型の間で PL/SQL 変換ファンクションを使用できます。これらの型が適切に対応していれば、JPublisher では必要な Java および PL/SQL コードが自動的に生成されます。

SQL または PL/SQL エンティティを Java に公開するのと同じ方法で、サーバー・サイド Java クラスをクライアント・サイド Java クラスに公開できます。これにより、アプリケーションからデータベースの Java クラスを直接コールできます。

JPublisher を使用すると、生成された Java クラスを Web サービスとして公開できます。たとえば、SQL または PL/SQL エンティティやサーバー・サイド Java エンティティを公開できます。

JPublisher は、生成されるほとんどの Java クラスで SQLJ コードを使用するため、Oracle SQLJ Translator および Oracle SQLJ Runtime が組み込まれています。Oracle SQLJ は、Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。

Oracle SQLJ Translator

JPublisher は生成されるクラスで SQLJ コードを使用するため、必要に応じて、コードの生成プロセスで Oracle SQLJ Translator を自動的に起動します。Oracle SQLJ Translator は、埋込み SQL 文を JDBC コールに変換します。

Oracle SQLJ Runtime

Oracle SQLJ Runtime はプログラムの実行中に使用され、JPublisher によって生成されたほとんどのクラスを実行します。SQLJ Runtime は、JDBC ドライバ上で動作する、Pure Java コードの Thin レイヤーです。SQLJ Runtime は、SQL 操作に関する情報を読み取り、JDBC ドライバに指示を伝達する中間プログラムとして機能します。

関連項目： 『Oracle Database JPublisher ユーザーズ・ガイド』

Oracle Database Companion CD の要件

この章では、Oracle Database 10g Companion CD 製品のインストールに必要な要件について説明します。

- [Oracle Database 10g Products の要件](#)
- [ハードウェアおよびソフトウェア要件](#)
- [ネットワークのトピック](#)

Oracle Database 10g Products の要件

この項の内容は、次のとおりです。

- ディスク領域要件
- ブラウザの要件
- Oracle Database の要件

関連項目： 1-3 ページの「Oracle Database 10g Products インストール・タイプでインストールされる製品」

ディスク領域要件

次のディスク領域サイズは、Oracle Database 10g Products のみに必要なサイズです。既存の Oracle Database インストールのサイズは含まれていません。

- TEMP 領域 : 100MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle` ディレクトリ : 100MB
- `SYSTEM_DRIVE:¥ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME` ディレクトリ : 950MB (概算)
- `SYSTEM_DRIVE:¥ORACLE_BASE¥oradata` : 40MB
- 合計 : 1GB (概算)

ブラウザの要件

Oracle Database 10g Companion Products には、Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 (Service Pack 1) などのフレーム、JavaScript、Java Development Kit (JDK) バージョン 1.4 および AWT をサポートする Web ブラウザが必要です。Windows Vista および Windows Server 2008 では、Microsoft Internet Explorer バージョン 7.0 が必要です。

Oracle Database の要件

「Oracle Database 10g Products」インストール・タイプをインストールするためには、システムが Oracle Database リリース 2 (10.2) にアクセスできる必要があります。

関連項目： 『Oracle Database Companion CD クイック・インストレーション・ガイド for Microsoft Windows (x64)』

ハードウェアおよびソフトウェア要件

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが認定されている場合があるため、認定済ハードウェア・プラットフォームとオペレーティング・システム・バージョンの最新リストは、Oracle MetaLink Web サイトで認定済マトリクスを確認してください。Oracle MetaLink の Web サイトには、次の URL でアクセスできます。

<https://metalink.oracle.com/>

Oracle MetaLink を使用するには、オンラインでの登録が必要です。ログイン後に、左側の列から「**Certify & Availability**」を選択します。「**Product Lifecycle**」ページで、「**Certifications**」ボタンを選択します。「**Other Product Lifecycle**」オプションには、「**Product Availability**」、「**Desupport Notices**」および「**Alerts**」が含まれます。

後述の各項では、次の要件の情報を示します。

- [Windows Telnet サービスのサポート](#)
- [Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)

Windows Telnet サービスのサポート

すべての Windows x64 オペレーティング・システムには、Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログインし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用するコマンドライン・ユーティリティの使用をサポートしていますが、Oracle Universal Installer、Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant などのデータベース GUI ツールはサポートしていません。

注意： Windows の「サービス」ユーティリティで Telnet サービスが開始されていることを確認してください。

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では、Windows 2003、Windows XP、Windows Vista および Windows Server 2008 上でのターミナル サービスを介した Oracle Database のインストール、構成および実行がサポートされます。Terminal Server を介したインストールで問題が発生した場合は、(mstsc/console を使用して) サーバーのターミナル サービスのコンソールセッションに接続することをお勧めします。

Windows 2003 は、リモート デスクトップでターミナル サービスを管理モードまたはターミナル サーバー モードに対して使用するように構成できます。Windows XP および Windows Vista の場合、リモート デスクトップを使用できるのはシングル ユーザー モードの場合のみです。Windows Server 2008 では、複数のリモート デスクトップセッションを持つことができます。

関連項目：

- ターミナル サービスの詳細は、次の URL の Microsoft Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/>

- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、Oracle MetaLink Web サイトを参照してください。

<https://metalink.oracle.com/>

ネットワークのトピック

一般的に、Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータは、ネットワークに接続されており、このインストールを格納するローカル記憶域、表示モニター、および DVD ドライブを備えています。

この項では、この一般的な条件を満たしていないコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする方法について説明します。次の場合について説明します。

- DHCP コンピュータへのインストール
- 複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール
- 複数の別名を持つコンピュータへのインストール
- ループバック・アダプタのインストール

DHCP コンピュータへのインストール

Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) は、ネットワーク上で動的な IP アドレスを割り当てます。動的アドレッシングにより、コンピュータはネットワークに接続するたびに異なる IP アドレスを持つことができます。コンピュータを接続したままで IP アドレスを変更できる場合もあります。DHCP システムでは、静的 IP アドレッシングと動的 IP アドレッシングを混在させることができます。

DHCP 設定時に、ソフトウェアにより IP アドレスが追跡され、ネットワーク管理が簡素化されます。これにより、コンピュータに固有の IP アドレスを手動で割り当てなくても、新しいコンピュータをネットワークに追加できます。ただし、DHCP プロトコルを使用するコンピュータに Oracle Database Companion CD 製品をインストールする前に、そのコンピュータにローカル IP アドレスを割り当てるためのループバック・アダプタをインストールする必要があります。

関連項目： 2-6 ページの「ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック」

複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール

Oracle Database を、複数の IP アドレスを持つコンピュータ（マルチホーム・コンピュータとも呼ばれます）にインストールできます。通常、マルチホーム・コンピュータには複数のネットワーク・カードが搭載されています。このため、通常は、コンピュータに複数のネットワーク・カードがあります。各 IP アドレスにはホスト名が関連付けられ、ホスト名の別名を設定することもできます。デフォルトでは、Oracle Universal Installer は ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定を使用してホスト名を検索します。ORACLE_HOSTNAME が設定されておらず、インストール先コンピュータに複数のネットワーク・カードが搭載されている場合、Oracle Universal Installer では hosts ファイルの最初の名前を使用してホスト名が判別されます（このファイルは通常、Windows 2003、Windows XP、Windows Vista および Windows Server 2008 の SYSTEM_DRIVE:¥WINDOWS¥system32¥drivers¥etc にあります）。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用してコンピュータにアクセスする必要があります。確認するには、短縮名（ホスト名のみ）およびフルネーム（ホスト名およびドメイン名）を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名に対して ping を実行します。どちらも機能する必要があります。

ORACLE_HOSTNAME 環境変数の設定

ORACLE_HOSTNAME 環境変数を設定する手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロールパネルの「システム」を表示します。
2. 「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで、「詳細」をクリックします。
3. 「詳細」タブで、「環境変数」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログ・ボックスで、「システム環境変数」の下の「新規」をクリックします。
5. 「新しいシステム変数」ダイアログ・ボックスで、次の情報を入力します。
 - 変数名: ORACLE_HOSTNAME
 - 変数値: 使用するコンピュータのホスト名
6. 「OK」をクリックし、続いて「環境変数」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
7. 「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、ネーミング・サービスに1つのIPと複数の別名で登録されます。ネーミング・サービスでは、これらの別名のいずれかが同じコンピュータに解決されます。この種のコンピュータに Oracle Database をインストールする前に、ORACLE_HOSTNAME 環境変数を、ホスト名を使用するコンピュータに設定してください。

ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタをインストールする場合、ループバック・アダプタによりコンピュータにローカルIPが割り当てられます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールすると、コンピュータにはユーザーが所有するネットワーク・アダプタとループバック・アダプタの最低2つのネットワーク・アダプタが存在します。Oracle Database Companion CD 製品には、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用する Windows が必要です。

プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序によって決定されます。最後にインストールしたアダプタがプライマリ・アダプタになります。ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合は、ループバック・アダプタをアンインストールし、再インストールする必要があります。

DHCP コンピュータでインストールする場合、ループバック・アダプタが必要です。

関連項目: 2-4 ページの「DHCP コンピュータへのインストール」

ループバック・アダプタをインストールする手順は、Oracle Database Companion CD 製品をインストールする Windows のバージョンによって異なります。

- [ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック](#)
- [Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [Windows Vista または Windows Server 2008 でのループバック・アダプタのインストール](#)
- [ループバック・アダプタの削除](#)

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかのチェック

ループバック・アダプタがコンピュータにインストールされているかどうかをチェックするには、`ipconfig /all` コマンドを実行します。

```
c:\> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合は、そのループバック・アダプタの値をリストするセクションが表示されます。次に例を示します。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:  
  Connection-specific DNS Suffix . . . :  
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter  
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50  
  DHCP Enabled. . . . . : Yes  
  Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes  
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129  
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

Windows 2003 または Windows XP でのループバック・アダプタのインストール

Windows 2003 または Windows XP でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルを開きます。
2. 「**ハードウェアの追加**」をダブルクリックしてハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか?」ウィンドウで、「**はい、ハードウェアを接続しています**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」ウィンドウで、インストール済ハードウェアのリストで、「**新しいハードウェア デバイスの追加**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」ウィンドウで、「**一覧から選択したハードウェアをインストールする**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
7. 「インストールするハードウェアの種類を選択する」ウィンドウのハードウェアの種類のリストから、「**ネットワーク アダプタ**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」ウィンドウで、次の選択を行います。
 - **製造元**: 「**Microsoft**」を選択します。
 - **ネットワーク アダプタ**: 「**Microsoft Loopback Adapter**」を選択します。
9. 「**次へ**」をクリックします。
10. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
11. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ウィンドウで、「**完了**」をクリックします。
12. Windows 2003 を使用している場合は、コンピュータを再起動します。
13. デスクトップで「**マイ ネットワーク**」を右クリックし、「**プロパティ**」を選択します。これにより、「ネットワーク接続」コントロールパネルが表示されます。
14. 作成した接続を右クリックします。これは通常、「ローカルエリア接続 2」です。「**プロパティ**」を選択します。
15. 「全般」タブで、「**インターネット プロトコル (TCP/IP)**」を選択し、「**プロパティ**」をクリックします。

16. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスで、「**次の IP アドレスを使う**」をクリックして次の処理を実行します。
 - a. **IP アドレス** : ループバック・アダプタのルーティング不能 IP を入力します。次のルーティング不能アドレスをお勧めします。
 - 192.168.x.x (x は 0 ~ 255 の任意の値)
 - 10.10.10.10
 - b. **サブネットマスク** : 192.68.x.x の場合は 255.255.255.0 を入力します。
10.10.10.10 の場合は 255.0.0.0 を入力します。
 - c. 入力した値を記録します。この値は、この手順で後で必要になります。
 - d. その他すべてのフィールドは空白のままにします。
 - e. 「**OK**」をクリックします。
17. 「**OK**」をクリックします。
18. 「**ネットワーク接続**」を閉じます。
19. コンピュータを再起動します。
20. `SYSTEM_DRIVE:\WINDOWS\system32\drivers\etc\hosts` ファイルで、localhost 行の直後に次の形式の行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

各項目の意味は次のとおりです。
 - `IP_address` は、手順 16 で入力したルーティング不能 IP アドレスです。
 - `hostname` は、コンピュータ名です。
 - `domainname` は、ドメイン名です。次に例を示します。

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```
21. ネットワーク構成をチェックします。
 - a. コントロールパネルの「**システム**」を開き、「**コンピュータ名**」タブを選択します。「**フルコンピュータ名**」に、ホスト名とドメイン名 (sales.us.mycompany.com など) が表示されていることを確認します。
 - b. 「**変更**」をクリックします。「**コンピュータ名**」にホスト名が表示され、「**フルコンピュータ名**」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。前述の例を使用すると、ホスト名は sales、ドメインは us.mycompany.com です。
 - c. 「**詳細**」をクリックします。「**このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス**」に、ドメイン名 (例 : us.mycompany.com) が表示されます。

Windows Vista または Windows Server 2008 でのループバック・アダプタのインストール

Windows Vista または Windows Server 2008 でループバック・アダプタをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルを開きます。
2. 「**ハードウェアの追加**」をダブルクリックしてハードウェアの追加ウィザードを起動します。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
4. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」ウィンドウで、「**一覧から選択したハードウェアをインストールする**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
5. 「インストールするハードウェアの種類を選択する」ウィンドウのハードウェアの種類のリストから、「**ネットワーク アダプタ**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。
6. 「ネットワーク アダプタの選択」ウィンドウで、次の選択を行います。
 - **製造元**: 「**Microsoft**」を選択します。
 - **ネットワーク アダプタ**: 「**Microsoft Loopback Adapter**」を選択します。
7. 「**次へ**」をクリックします。
8. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。
9. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」ウィンドウで、「**完了**」をクリックします。

残りの手順は、Windows XP の場合と同じです。

ループバック・アダプタの削除

ループバック・アダプタを削除する手順は、次のとおりです。

1. Windows コントロール パネルの「**システム**」を表示します。
2. 「ハードウェア」タブで、「**デバイス マネージャ**」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「**ネットワーク アダプタ**」を展開します。
「**Microsoft Loopback Adapter**」が表示されます。
4. 「**Microsoft Loopback Adapter**」を右クリックし、「**アンインストール**」を選択します。
5. 「**OK**」をクリックします。

Oracle Database Companion CD ソフトウェア のインストール

この章の内容は、次のとおりです。

- Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順
- インストール・ソフトウェアへのアクセス
- Oracle Database 10g Products のインストール
- 最新のパッチ・セットのインストール
- Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

Companion CD 製品をインストールするための全般的な手順

第1章および第2章の作業の完了後、Companion CD 製品をインストールする一般的な手順に従います。

1. 次の点を考慮してください。
 - **対話型モードあるいはサイレントまたは非対話型モードでのインストール:** この章では、対話型モードでインストールする場合の手順を説明しています。レスポンス・ファイルを使用してサイレントまたは非対話型モードでインストールを実行する場合（たとえば、サイトで複数のインストールが必要な場合）、詳細は、[付録 A 「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール」](#) を参照してください。
 - **他の言語でのインストール:** 言語の考慮事項については、B-2 ページの「[異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用](#)」を参照してください。
2. ソフトウェアをハード・ドライブから、またはリモートでインストールする必要がある場合、3-2 ページの「[インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)」の手順に従ってください。
3. Oracle Database 10g Products をインストールするには、3-5 ページの「[Oracle Database 10g Products のインストール](#)」の手順に従ってください。これらの製品がすでにインストールされている場合は、最新のパッチ・セットの更新について、3-7 ページの「[最新のパッチ・セットのインストール](#)」の手順に従ってください。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database ソフトウェアは DVD から入手できます。このリリースのコンポーネントのインストールには、以前のリリースの Oracle Universal Installer を使用しないでください。

次のいずれかの状況で Oracle Database Companion CD 製品をインストールする必要がある場合、インストール手順に進む前にこの項の手順に従ってください。

- [ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー](#)
- [リモート DVD ドライブからのインストール](#)
- [リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール](#)

ハード・ディスクへの Oracle Database ソフトウェアのコピー

Oracle Database Companion CD 製品の DVD からインストールするかわりに、DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールできます。ネットワークで Oracle Database Companion CD 製品の多くのインスタンスをインストールする場合、または製品をインストールするコンピュータに DVD ドライブがない場合は、この方法が簡単です。

インストール・メディアの内容をハード・ディスクにコピーする手順は、次のとおりです。

1. ハード・ドライブにディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
c:\install\companion
```
2. インストール・メディアの内容を作成したディレクトリにコピーします。
3. 必要なインストール・ファイルをすべてコピーした後に、Oracle Database Companion CD 製品をインストールできます。

リモート DVD ドライブからのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータに DVD ドライブがない場合は、リモート DVD ドライブからインストールを実行できます。次の点について確認してください。

- リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有
- ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング

リモート・コンピュータでの DVD ドライブの共有

使用するリモート DVD ドライブで、共有アクセスを可能にする必要があります。これを設定するには、DVD ドライブがあるリモート・コンピュータで次の手順を実行します。

1. Administrator ユーザーとしてリモート・コンピュータにログインします。
2. エクスプローラを起動します。
3. DVD のドライブ文字を右クリックして、「共有」（または「共有とセキュリティ」）を選択します。
4. 「共有」タブをクリックして、次のようにします。
 - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
 - b. 「共有名」で、dvd などの共有名を指定します。この名前は、ローカル・コンピュータで DVD ドライブをマッピングする際に使用します。3-3 ページの「ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング」に記載されている手順 1 の d を参照してください。
 - c. 「アクセス許可」をクリックします。Oracle Database をインストールするためにアクセスするユーザーには、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。
 - d. 終了したら「OK」をクリックします。
5. Oracle Database インストール・メディアを DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの DVD ドライブのマッピング

ローカル・コンピュータで次の手順を実行して、リモート DVD ドライブをマッピングし、マッピングされたドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

1. リモート DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータでエクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」メニューから、「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択して、「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスを表示します。
 - c. リモート DVD ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」で、次の形式を使用して、リモート DVD ドライブの場所を入力します。

```
\\remote_hostname\share_name
```

各項目の意味は次のとおりです。
 - remote_hostname は、DVD ドライブのあるリモート・コンピュータの名前です。
 - share_name は、前述の手順 4 で入力した共有名です。次に例を示します。

```
computer2\dvd
```
 - e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合は「異なるユーザー名」をクリックして、ユーザー名を入力します。
 - f. 「完了」をクリックします。
2. マッピングされた DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータでのインストール

Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールおよび実行（つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、これらのコンポーネントを実行）するには、コンピュータへの物理的なアクセスがない場合、VNC または Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータで実行されていればリモート・コンピュータでインストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアを実行する必要があります。

次のいずれかの方法で Oracle Database Companion CD 製品をリモート・コンピュータでインストールできます。

- Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。
- DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、DVD からインストールできます。

リモート・コンピュータでのハード・ドライブからのインストール

Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容をハード・ドライブにコピーした場合は、ハード・ドライブからインストールできます。

次の手順を完了する必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがインストールされ、リモート・コンピュータとローカル・コンピュータで稼働していることを確認します。
2. Oracle Database Companion CD 製品の DVD の内容を格納したハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。

リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール

DVD をローカル・コンピュータ上のドライブに挿入し、DVD からインストールできます。これは 3-3 ページの「[リモート DVD ドライブからのインストール](#)」で説明した状況と類似しています。

次の手順を完了する必要があります。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがインストールされ、リモート・コンピュータとローカル・コンピュータで稼働していることを確認します。
2. ローカル・コンピュータで、DVD ドライブを共有します。
リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 DVD ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを行うにはリモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
この手順は、3-4 ページの「[リモート・コンピュータでのリモート DVD ドライブからのインストール](#)」に記載されています。
3. リモート・アクセス・ソフトウェアを使用して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 DVD ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。

Oracle Database 10g Products のインストール

この項の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置](#)
- [Oracle Database 10g Products のインストール手順](#)

Oracle Database 10g Products の Oracle ホームの位置

Oracle Database 10g Products は、既存の Oracle Database 10g リリース 2 (10.2) の Oracle ホームにインストールしてください。デフォルトでは、次の製品はインストールされません。

- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- データベース・サンプル
- Oracle Text ナレッジ・ベース
- JAccelerator (NCOMP)
- *interMedia* Image Accelerator

Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別

Oracle Database 10g Products を既存の Oracle ホームにインストールする前に、この Oracle ホームの位置を識別する必要があります。Oracle ホーム・ディレクトリのパスが不明の場合には、Oracle Universal Installer で確認できます。

Oracle ホーム・ディレクトリのパスを確認するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
3. 「インベントリ」ウィンドウの各 Oracle ホームを開き、**Oracle Database 10g 10.2.0.4.0**を検索します。
4. 「閉じる」をクリックし、次に「取消」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
5. 次の項に記載されている Oracle Database 10g Products のインストールを開始する際は、Oracle ホームの名前を控えておきます。

Oracle Database 10g Products のインストール手順

Oracle Database 10g Products をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Administrators グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログインします。

プライマリ ドメイン コントローラ (PDC) またはバックアップドメイン コントローラ (BDC) にインストールする場合は、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

2. Oracle SQLJ などを使用する予定の Oracle データベースが実行中でアクセス可能であることを確認します。

Windows の「サービス」ユーティリティを使用して、Oracle Database が実行中かどうかを確認できます。このユーティリティは、Windows のコントロール パネルまたは「管理ツール」メニュー（「スタート」→「プログラム」）にあります。Oracle データベースの名前には、最初に OracleService が付きます。サービスの名前を右クリックして、メニューから「開始」を選択します。

3. ORACLE_HOME 環境変数がある場合は、（コントロール パネルの「システム」から）この環境変数を削除します。

環境変数の削除方法については、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： ORACLE_HOME 環境変数は、レジストリで自動的に設定されます。この変数を手動で設定すると、インストールできません。

4. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、companion ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。

サポートされているすべての Windows プラットフォームでは、Oracle Database のインストールに同じインストール・メディアを使用します。

5. setup.exe をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
6. 「ようこそ」ウィンドウで「次へ」をクリックします。
7. 「ホームの詳細の指定」ウィンドウで、次のようにします。
 - a. **名前：** 指定した Oracle ホームが Oracle Database Oracle ホームであることを確認します。（デフォルトの Oracle ホームが設定されています。）
 - b. **パス：** Oracle Database の Oracle ホームのディレクトリの位置を入力します。このディレクトリには、Oracle ホームのファイルをインストールします。（デフォルトの Oracle ホームのディレクトリが設定されています。）空白を含むディレクトリ・パスは入力しないでください。正しいディレクトリ・パスを入力した後、Oracle Universal Installer により新規ディレクトリが作成されます。

関連項目： 正しい Oracle ホームの確認方法の詳細は、3-5 ページの「[Oracle ホーム・ディレクトリの位置の識別](#)」を参照してください。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「製品固有の前提条件のチェック」ウィンドウで、Oracle Universal Installer によるシステム・チェックの際に発生したエラーを確認し、エラーがあった場合は修正します。
10. 「次へ」をクリックします。
11. 「サマリー」ウィンドウで、インストールされる製品のリストを確認して「インストール」をクリックします。
12. インストールの完了後、「終了」、続いて「はい」をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。

13. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、OraInstalldate_time ディレクトリを削除します。OraInstalldate_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。このディレクトリは、TEMP 環境変数に設定されている場所に作成されます。

コンピュータを再起動しても、OraInstalldate_time ディレクトリが削除されます。

最新のパッチ・セットのインストール

Oracle Companion CD コンポーネントを正しくインストールした後、最新のパッチ・セットをインストールすることをお勧めします。パッチ・セットをインストールすることで、最新の Oracle Database Companion CD に更新されます。

OracleMetaLink を使用するには、オンラインでの登録が必要です。OracleMetaLink にログインした後、左側の列から「Patches」を選択します。

パッチを見つけ、ダウンロードする手順は、次のとおりです。

1. OracleMetaLink の Web サイトにアクセスします。

<https://metalink.oracle.com/>

2. OracleMetaLink にログインします。

注意： OracleMetaLink の登録ユーザーでない場合は、「**Register for MetaLink!**」をクリックします。表示される指示に従って登録してください。

3. OracleMetaLink のメイン・ページで「Patches & Updates」をクリックします。
4. 「Simple Search」を選択します。
5. 次の情報を指定して「Go」をクリックします。
 - 「Search By」フィールドで「Product」または「Family」を選択し、次に Oracle SQL など Companion CD 製品を選択します。
 - 「Release」フィールドで現行のリリース番号を指定します。
 - 「Patch Type」フィールドで、Patchset/Minipack を指定します。
 - 「Platform or Language」でプラットフォームを選択します。
6. 「Results for Platform」の下で、OracleMetaLink を使用して Oracle Database の最新のパッチ・セットを検索します。
7. 使用可能なパッチのリストから、ダウンロードするパッチ番号をクリックします。
8. 「View Readme」をクリックし、README を確認してからダウンロードを実行します。

各パッチには、インストール要件および手順を記述した README ファイルがあります。一部のパッチは Oracle Universal Installer でインストールしますが、その他のパッチには専用の手順が必要です。作業を進める前に、必ず README を読むことをお勧めします。
9. 「Patch Set」ページに戻り、「Download」をクリックしてファイルをシステムにダウンロードして保存します。
10. unzip ユーティリティを使用してパッチ zip ファイルを解凍します。

Oracle Database Companion CD ソフトウェアの削除

Oracle Universal Installer を使用して Oracle ソフトウェアを削除する手順は、次のとおりです。

注意： Oracle ソフトウェアの削除には、必ず Oracle Universal Installer を使用してください。Oracle Universal Installer を使用して先にソフトウェアを削除してから、Oracle ホーム・ディレクトリを削除してください。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「製品の削除」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。
3. 「インベントリ」ウィンドウで、削除する Oracle ホームと Oracle 製品を選択します。
4. 特定の製品を削除するには、ツリー・ウィンドウでその製品を選択します。
5. 「削除」をクリックします。
選択した製品と依存コンポーネントを削除してよいか、確認する画面が表示されます。
6. 「はい」をクリックします。
ソフトウェアの削除の進行状況が表示されます。

Oracle Database Companion CD 製品の開始

この章では、Oracle Database Companion CD 製品のインストール後の処理について説明します。

- [インストール内容の確認](#)
- [Oracle Ultra Search の開始](#)

注意： Windows Vista および Windows Server 2008 では、Oracle Universal Installer、Oracle Process Management Notification (OPMN) などのユーティリティには管理者権限が必要です。

インストール内容の確認

Oracle ソフトウェアのインストール内容は、Oracle Universal Installer を使用して確認できません。

1. 「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。

Oracle Universal Installer は、任意の Oracle ホームからアクセスできます。

2. 表示された「ようこそ」ウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。

「インベントリ」ウィンドウが表示され、システム上のすべての Oracle ホームと各 Oracle ホームにインストールされている製品が表示されます。製品のパスを確認するには、「環境」タブをクリックします。

Oracle Ultra Search の開始

Oracle Ultra Search をインストールすると、Oracle Universal Installer によって、Oracle Ultra Search に固有の次の管理アカウントが作成されます。

- WK_TEST: デフォルトの Ultra Search インスタンス・スキーマ。
- WKPROXY: Ultra Search プロキシ・ユーザー。
- WKSYS: Ultra Search システム・ディクショナリおよび PL/SQL パッケージの格納に使用されます。

関連項目: 『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Database Companion CD のインストール

この付録の内容は、次のとおりです。

- [レスポンス・ファイルの使用方法](#)
- [レスポンス・ファイルの準備](#)
- [レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)

レスポンス・ファイルの使用方法

Oracle Universal Installer の起動時にレスポンス・ファイルを指定することで、Oracle ソフトウェアのインストールおよび構成を完全または部分的に自動化できます。Oracle Universal Installer では、一部またはすべてのプロンプトに対する応答に、レスポンス・ファイルに入力した値が使用されます。

通常、Oracle Universal Installer は対話モードで実行されます。つまり、Graphical User Interface (GUI) 画面で情報の入力を要求されます。レスポンス・ファイルを使用してこの情報を入力する場合は、次のいずれかのモードでコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行します。

- **サイレント・モード**: Oracle Universal Installer 画面は一切表示されません。かわりに、Oracle Universal Installer を起動したコマンド・ウィンドウに進捗情報が表示されます。サイレント・モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定して `setup.exe` を実行し、Oracle Universal Installer プロンプトに対する応答を含むレスポンス・ファイルを組み込みます。
- **非対話（または抑制）モード**: レスポンス・ファイルに情報が入力されていない画面のみが表示されます。また、レスポンス・ファイルまたはコマンドライン・プロンプト内の変数を使用して、情報の入力を求めない他の Oracle Universal Installer 画面（「ようこそ」画面や「サマリー」画面など）を非表示にできます。非対話モードを使用するには、`-silent` パラメータを指定せずに `setup.exe` を実行します。ただし、レスポンス・ファイルまたは適用する他のパラメータは組み込みます。

レスポンス・ファイルにリストされている変数に値を入力して、サイレントまたは非対話型インストールの設定を定義します。たとえば、Oracle ホーム名を指定するには、次の例に示すように、`ORACLE_HOME_NAME` 変数に適切な値を入力します。

```
ORACLE_HOME_NAME="OraDBHome1
```

レスポンス・ファイルの変数の設定を指定する別の方法は、その設定を Oracle Universal Installer の実行時にコマンドラインの引数として渡す方法です。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -silent "ORACLE_HOME_NAME=OraDBHome1" ...
```

この方法は、パスワードなどの機密情報をレスポンス・ファイルに埋め込まない場合に特に役立ちます。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -silent "s_sysPwdFresh=binks342" ...
```

変数とその設定値は必ず引用符で囲んでください。

関連項目: レスポンス・ファイルの形式の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

サイレントまたは非対話モードを使用する理由

次の表に、Oracle Universal Installer をサイレントまたは非対話型モードで実行する理由をいくつか示します。

表 A-1 サイレントまたは非対話モードを使用する理由

モード	使用方法
サイレント	<p>次の場合にサイレント・モードを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アンアテンド・インストールを実行する場合 ■ ユーザーとの対話なしで複数のシステムに同様のインストールを複数実行する場合 <p>Oracle Universal Installer には、起動に使用した端末に進捗情報が表示されませんが、Oracle Universal Installer 画面は表示されません。</p>
非対話	<p>複数のシステムに類似する Oracle ソフトウェアをインストールし、すべての Oracle Universal Installer プロンプトではなく一部にのみデフォルトの応答を指定する場合は、非対話型モードを使用します。</p> <p>特定のインストーラ画面に必要な情報をレスポンス・ファイルに指定しない場合、Oracle Universal Installer でその画面が表示されます。必要な情報をすべて指定した画面は表示されません。</p>

レスポンス・ファイルの一般的な使用手順

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Database Companion CD 製品をインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 必要なインストール設定用にレスポンス・ファイルをカスタマイズするか、または作成します。

レスポンス・ファイルは、次のいずれかの方法で作成できます。

- 製品に同梱されているサンプル・レスポンス・ファイルを変更する方法
- 記録モードを使用してコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行する方法

レスポンス・ファイルをカスタマイズまたは作成する方法は、A-4 ページの「[レスポンス・ファイルの準備](#)」を参照してください。

2. このレスポンス・ファイルを指定して、サイレントまたは非対話モードでコマンド・プロンプトから Oracle Universal Installer を実行します。

レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行する方法は、A-6 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」を参照してください。

レスポンス・ファイルの準備

この項では、サイレントまたは非対話モードのインストール時に使用するレスポンス・ファイルの準備に使用できる方法について説明します。

- [レスポンス・ファイル・テンプレートの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの記録](#)

レスポンス・ファイル・テンプレートの編集

Oracle には、`companionCD.db.rsp` という Oracle Database 10g Products インストール・タイプ用レスポンス・ファイル・テンプレートが用意されています。このファイルは、Oracle Database インストール・メディアの `companion¥response` ディレクトリにあります。

レスポンス・ファイル・テンプレートを使用してレスポンス・ファイルを作成する方法は、Enterprise Edition または Standard Edition インストール・タイプの場合に使用すると便利です。

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Database メディアにある `companion¥Response` ディレクトリから、適切なレスポンス・ファイルをハード・ドライブにコピーします。
2. テキスト・ファイル・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

Oracle Database Companion CD 製品のインストールに固有の設定の編集に加えて、`FROM_LOCATION` パスが正しく、インストール・メディアの `stage` ディレクトリにある `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この変数は、次に示すような絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="¥¥myserver¥companion¥stage¥products.xml"
```

パスワードなどの機密情報は、レスポンス・ファイル内ではなく、コマンドラインから指定できます。この方法については、A-2 ページの「[レスポンス・ファイルの使用方法](#)」を参照してください。

関連項目： レスポンス・ファイルの作成方法の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』を参照してください。インストール済の Oracle Database で、「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - HOME_NAME」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。このマニュアルは HTML 形式で表示されます。

3. A-6 ページの「[レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルの記録

レスポンス・ファイルを作成するには、記録モードを使用して Oracle Universal Installer を対話モードで実行します。この方法は、カスタム・インストールまたはソフトウェアのみのインストールの場合に使用すると便利です。

レスポンス・ファイルを記録すると「サマリー」ウィンドウを完了した直後にレスポンス・ファイルが生成されるため、実際に Oracle Database Companion CD 製品をインストールしてレスポンス・ファイルを作成する必要がなくなります。この方法でレスポンス・ファイルを作成した後は、必要に応じてその内容をカスタマイズできます。

非対話モードのインストール中に記録モードを使用する場合、Oracle Universal Installer は、元のソース・レスポンス・ファイルで指定された変数値を新規レスポンス・ファイルに記録します。

注意： 記録モードを使用して、基本インストール・タイプに基づくレスポンス・ファイルを作成することはできません。

レスポンス・ファイルを記録する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルを作成しているコンピュータが、[第 1 章](#)で説明した要件を満たしていることを確認します。
2. コマンド・プロンプトで、cd コマンドを使用して Oracle Universal Installer の setup.exe 実行可能ファイルを含むディレクトリに変更します。

setup.exe は、インストール DVD の db ディレクトリにあります。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。

3. 次のコマンドを入力します。

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile response_file_name

response_file_name を新規のレスポンス・ファイルの完全なパスに置き換えます。次に例を示します。
```

```
SYSTEM_DRIVE:¥setup.exe_location> setup -record -destinationFile
c:¥response_files¥install_oracle10_2.rsp
```

4. Oracle Universal Installer が起動された後、インストールの設定を入力します。この設定がレスポンス・ファイルに記録されます。
5. 「サマリー」ウィンドウが表示された後、次のいずれかを実行します。
 - 「インストール」をクリックしてレスポンス・ファイルを作成してから、インストールを続行します。
 - レスポンス・ファイルを作成するだけで、インストールを続行しない場合は、「取消」をクリックします。インストールは停止しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer は、コマンドラインで指定されたパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルを保存します。

- 新規レスポンス・ファイルを編集して、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータの環境固有の変更を行います。

Oracle Database Companion CD 製品のインストールに固有の設定の編集に加えて、FROM_LOCATION パスが正しく、インストール・メディアの stage ディレクトリにある products.xml ファイルを指していることを確認します。この変数は、次に示すような絶対パスを指すように設定することもできます。

```
FROM_LOCATION="%myserver%companion%response%stage%products.xml"
```

パスワードなどの機密情報は、レスポンス・ファイル内ではなく、コマンドラインから指定できます。この方法については、A-2 ページの「レスポンス・ファイルの使用法」を参照してください。

- 次の「レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

レスポンス・ファイルを使用した Oracle Universal Installer の実行

この段階では、作成したレスポンス・ファイルを指定してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行し、インストールを実行する準備ができています。Oracle Universal Installer 実行可能ファイル setup.exe には、いくつかのオプションが用意されています。これらのオプションについてのヘルプ情報を表示するには、次のように -help オプションを指定して setup.exe を実行します。

```
SYSTEM_DRIVE:%setup.exe_location> setup -help
```

新規のコマンド・ウィンドウが表示され、起動を準備中というメッセージが表示されます。すぐに、そのウィンドウにヘルプ情報が表示されます。

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

- Oracle Database Companion CD 製品をインストールするコンピュータにレスポンス・ファイルを配置します。
- コマンド・プロンプトから、適切なレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer を実行します。次に例を示します。

```
SYSTEM_DRIVE:%setup.exe_location> setup [-silent] "variable=setting" [-nowelcome] [-noconfig] [-nowait] -responseFile filename
```

各項目の意味は次のとおりです。

- *filename*: レスポンス・ファイルのフル・パスを指定します。
- *-silent*: サイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「ようこそ」画面は表示されません。*-silent* を使用する場合、*-nowelcome* オプションは必要ありません。
- *"variable=setting"* は、レスポンス・ファイル内の変数を参照します。この変数は、レスポンス・ファイル内に設定するのではなく、コマンドラインから実行する変数です。変数とその設定値は引用符で囲んでください。
- *-nowelcome*: インストール時に表示される「ようこそ」画面が表示されません。
- *-noconfig*: インストール時にコンフィギュレーション・アシスタントを実行せず、ソフトウェアのみのインストールを実行します。
- *-nowait*: サイレント・インストールが完了すると、コンソール・ウィンドウを閉じます。

関連項目：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用した削除の詳細は、『Oracle Universal Installer および Opatch ユーザーズ・ガイド』の製品の削除に関する項を参照してください。

Oracle Database Companion CD グローバル化セッション・サポートの構成

この付録では、次のグローバル化セッション・サポートについて説明します。

- 異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用
- NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用

この項では、次の機能について説明します。

- 様々な言語による Oracle Universal Installer の実行
- 異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

様々な言語による Oracle Universal Installer の実行

デフォルトでは、Oracle Universal Installer はオペレーティング・システムで選択した言語で実行されます。Oracle Universal Installer は、次の追加言語で実行できます。

- ポルトガル語 (ブラジル)
- ドイツ語
- 日本語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムの実行されている言語を変更します。たとえば、Windows 2003 の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」メニューから、「コントロールパネル」→「地域と言語のオプション」を選択します。
 - b. ドロップダウン・リストで前述の一覧から言語を選択し、「OK」を選択します。
2. 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Microsoft Windows (x64)』の指示に従い、Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択した言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられません。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant、Database Configuration Assistant など）の使用に他の言語を選択できます。これにより、Oracle Universal Installer の実行で使用される言語が変わるわけではありません。Oracle コンポーネントを選択した言語で実行するには、言語をオペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「コントロールパネル」の「地域の設定」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
 - **インストール・メディアから**：インストール・メディアから companion ディレクトリに移動し、setup.exe をダブルクリックします。
 - **インストールされた Oracle Database Companion CD から**：「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
2. 「インストール・タイプの選択」ウィンドウで、「製品の言語」ボタンを選択します。「言語の選択」ウィンドウが表示されます。
3. 「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントの使用時に使用する言語を選択します。
4. > 矢印を使用して「選択された言語」フィールドに言語を移動し、「OK」をクリックします。
5. インストールする適切な製品を選択し、「次へ」をクリックします。
インストールが完了すると、インストールしたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが選択した言語で表示されます。

NLS_LANG パラメータを使用したロケールおよびキャラクタ・セットの構成

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、各自が選択したロケールおよびキャラクタ・セット設定でデータベースと対話できます。NLS_LANG パラメータは、Oracle ソフトウェアのロケール動作を指定します。このパラメータによって、クライアント・アプリケーションとデータベースで使用される言語と地域が設定されます。また、SQL*Plus などのクライアント・プログラムでのデータの入力と表示に使用されるキャラクタ・セットも設定されます。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOMEID¥NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。このパラメータの形式は、次のとおりです。

```
NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET
```

各項目の意味は次のとおりです。

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を示すための規則を指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算するための規則を指定します。
CHARACTER_SET	データベース・クライアントのエンコーディングを指定します。これは、クライアント・プログラムでデータの入力または表示に使用されるキャラクタ・セットです。

次の表に、NLS_LANG パラメータ値の一部を示します。

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P15
	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P1
	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
	FRENCH_FRANCE.AL32UTF8
日本語 (日本)	JAPANESE_JAPAN.JA16EUC
	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
	JAPANESE_JAPAN.AL32UTF8

関連項目：

- Oracle Database の Windows インストールにおける NLS_LANG の動作については、『Oracle Database インストレーション・ガイド for Microsoft Windows (x64)』を参照してください。
- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド for Microsoft Windows (x64)』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータとグローバリゼーション・サポート初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。
- オペレーティング・システムのロケール環境設定を判別する方法は、該当するオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

Oracle Companion CD のポート番号の管理

この付録では、デフォルトのポート番号を示し、割り当てられたポートをインストール終了後に変更する方法について説明します。

- [ポートの管理](#)
- [ポート番号とアクセス URL の表示](#)
- [Oracle コンポーネントのポート番号とプロトコル](#)
- [Oracle Ultra Search ポートの変更](#)

ポートの管理

コンポーネントには、インストール時に Oracle Universal Installer により一連のデフォルト・ポート番号からポート番号が割り当てられます。多数の Oracle Database コンポーネントおよびサービスがポートを使用します。管理者は、これらのサービスで使用されるポート番号を把握し、同じポート番号がホスト上の 2 つのサービスに使用されないことを確認する必要があります。

ほとんどのポート番号はインストール時に割り当てられます。各コンポーネントおよびサービスには、ポート範囲が割り当てられています。これは、Oracle Database でポートの割当て時に使用される一連のポート番号です。Oracle Database では、範囲の最小番号から順番に次のチェックが実行されます。

- ホスト上の他の Oracle Database インストールで使用されているポートかどうか。
インストールがその時点で稼働中または停止されている場合も、Oracle Database ではポートが使用されているかどうかを検出できます。
- 現在実行中のプロセスで使用されているポートかどうか。
これは、ホスト上のプロセスであれば Oracle Database 以外のプロセスであってもかまいません。

前述の設問に 1 つでも該当する場合、Oracle Database は、割当済ポート範囲内で次に上位のポートに移動し、空きポートが見つかるまでチェックを続行します。

ポート番号とアクセス URL の表示

ほとんどの場合、Oracle Database コンポーネントのポート番号は、ポートの構成に使用するツールにリストされます。また、一部の Oracle Database アプリケーションのポートは、portlist.ini ファイルに示されます。このファイルは、`ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥install` にあります。

ポート番号を変更しても portlist.ini ファイル内では更新されないため、このファイルに依存できるのはインストール直後のみです。ポート番号を検索または変更するには、この付録で説明する方法を使用します。

Oracle コンポーネントのポート番号とプロトコル

次の表に、インストール時に構成されるコンポーネントに対して使用されるポート番号とプロトコルを示します。デフォルトでは、範囲内で使用可能な先頭のポートがコンポーネントに割り当てられます。

表 C-1 Oracle コンポーネントで使用されるポート

コンポーネントと説明	デフォルトのポート番号	ポート範囲	プロトコル
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の HTTP ポート。このポート番号は、「カスタム」インストール・タイプを使用した Oracle Ultra Search のインストール時に自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、C-3 ページの「Oracle Ultra Search ポートの変更」を参照してください。	5620	5620 ~ 5639	TCP/HTTP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の RMI ポート。このポート番号は、「カスタム」インストール・タイプを使用した Oracle Ultra Search のインストール時に自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、C-3 ページの「Oracle Ultra Search ポートの変更」を参照してください。	5640	5640 ~ 5659	TCP
Oracle Ultra Search Oracle Ultra Search 用の JMS ポート。このポート番号は、「カスタム」インストール・タイプを使用した Oracle Ultra Search のインストール時に自動的に割り当てられます。ポート番号の変更方法は、C-3 ページの「Oracle Ultra Search ポートの変更」を参照してください。	5660	5660 ~ 5679	TCP

Oracle Ultra Search ポートの変更

次の各項では、Oracle Ultra Search ポートの変更方法について説明します。

HTTP ポートの変更

HTTP ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\http-web-site.xml` ファイル内の `web-site` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<web-site port="5620"...>
```

RMI ポートの変更

RMI ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\rmi.xml` ファイルの `rmi-server` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<rmi-server port="5640"...>
```

JMS ポートの変更

JMS ポートを変更するには、`ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\oc4j\j2ee\OC4J_SEARCH\config\jms.xml` ファイルの `jms-server` 要素の `port` 属性を変更します。

```
<jms-server port="5660"...>
```

Oracle Database Companion CD の インストールに関するトラブルシューティング

この付録では、次のトラブルシューティングについて説明します。

- 要件の確認
- インストール・セッションのログの確認
- インストール失敗後のクリーン・アップ
- サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティングの手順を実行する前に、次を実行してください。

- 第2章「Oracle Database Companion CD の要件」をチェックし、システムが要件を満たしていることと、インストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。
- 製品をインストールする前に、該当するプラットフォーム用の製品に関するリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、Oracle Database インストール・メディアで提供されています。リリース・ノートの最新バージョンは、次の Oracle Technology Network の Web サイトにあります。

<http://www.oracle.com/technology/index.html>

インストール・セッションのログの確認

Oracle Universal Installer を最初に行うと、システムにインストールされる製品のインベントリと他のインストール情報を記録するために、`DRIVE_LETTER:\ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\Inventory\logs` ディレクトリが作成されます。

ログ・ファイルの名前は `installActionsdate_time.log` で、`date_time` はインストールの日付と時刻です。たとえば `installActions2004-055-14_09-00-56-am.log` などです。

インストール済コンポーネントのリストは、Oracle Universal Installer のウィンドウで「インストールされた製品」をクリックしても確認できます。

注意： `Inventory` ディレクトリまたはその内容の削除や、手動での変更は行わないでください。これを行うと、Oracle Universal Installer でシステムにインストールする製品を見つけれなくなります。

`installActionsdate_time.log` ファイルには、インストール・プロセス中に実行されたアクションのログが記録されます。インストール中にリンク・エラーがあれば、それもこのファイルに記録されます。`installActionsdate_time.log` ファイルは削除または変更しないでください。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールに失敗した場合は、インストール中に Oracle Universal Installer によって作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。ファイルを削除するには、次のようにします。

1. Oracle Database インストール・メディアを挿入し、`companion` ディレクトリに移動します。あるいは、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。`setup.exe` をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「ようこそ」ウィンドウの「製品の削除」をクリックするか、Oracle Universal Installer のいずれかのウィンドウで「インストールされた製品」をクリックします。「インベントリ」ウィンドウが表示され、インストールされている製品の一覧が表示されます。
3. 削除する製品を選択して「削除」をクリックします。

注意： システムに複数のインストール環境がある場合、他の Oracle ホームにインストールされている製品も「インベントリ」画面に表示されます。他の Oracle ホームから製品を選択すると、それらの製品も削除されます。

サイレントまたは非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

サイレントまたは非対話型インストールが正常に実行されたかどうかを判断するには、`DRIVE_LETTER:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` ディレクトリにある `silentInstallActionsdate_time.log` ファイルを調べます。

サイレント・インストールは、次の場合に失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定していない場合
- 不正または不完全なレスポンス・ファイルを指定している場合

たとえば、製品固有のデータは正しく指定しているが、ステージング領域の位置の指定が誤っていることがよくあります。このような場合は、`FROM_LOCATION` 変数をチェックし、インストール・メディアにある `products.xml` ファイルを指していることを確認します。この `products.xml` は、インストール・メディアの `companion¥stage` にあります。

- Oracle Universal Installer にディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer またはコンフィギュレーション・アシスタントは、実行時にレスポンス・ファイルの妥当性を検査します。妥当性検査に失敗すると、インストールまたは構成プロセスは終了します。コンテキスト、形式または型が不正な場合、Oracle Universal Installer では、そのパラメータ値はファイルに指定されていないとみなされます。

関連項目：対話型インストールのログ・ファイルの詳細は、D-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

索引

A

Administrators グループ
Oracle Database Products のインストール要件, 3-6

D

Database Configuration Assistant (DBCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の非使用,
A-6
DHCP コンピュータ, インストール, 2-4
DVD
ドライブ、インストール, 3-3
ハード・ドライブへのコピー, 3-2

I

interMedia Image Accelerator
インストール, 3-5
IP アドレス, 複数, 2-4

J

JAccelerator, 1-4
JAccelerator (NCOMP)
インストール, 3-5
JPublisher
Oracle SQLJ Runtime, 1-5
Oracle SQLJ Translator, 1-5
インストール, 3-5
説明, 1-5

L

Legato Single Server Version (LSSV), 1-3

N

NCOMP, 「ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ」
を参照
Net Configuration Assistant (NetCA)
サイレントまたは非対話型インストール時の非使用,
A-6
NLS_LANG パラメータ
説明, B-3

O

Oracle Database 10g Companion Products
削除, 3-8
Oracle Database 10g Products
JPublisher, 1-5
Oracle Database のサンプル, 1-4
Oracle Text
提供されるナレッジ・ベース, 1-4
Oracle Ultra Search, 1-4
Oracle ホーム・ディレクトリ、指定, 3-5
Oracle ホームの位置, 3-5
インストール, 3-5
インストールされる製品, 1-3
インストール・タイプのコンポーネント, 1-3
インストールの位置, 3-5
削除, 3-8
説明, 1-3
ディスク領域要件, 2-2
データベース要件, 2-2
ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ, 1-4
要件, 2-2
Oracle Database Companion CD
インストールの概要, 1-1
ソフトウェアのインストール, 3-1
ソフトウェアの認定, 2-3
トラブルシューティング, D-1
ハードウェアの認定, 2-3
Oracle Database のサンプル
説明, 1-4
Oracle Database Recovery Manager (RMAN)
説明, 1-3
Oracle Database のサンプル
インストール, 3-5
サンプル・スキーマ, 1-4
必須製品, 1-4
Oracle HTML DB
削除, 3-8
パッチのダウンロード, 3-7
Oracle HTTP Server
削除, 3-8
パッチのダウンロード, 3-7
Oracle *interMedia Image Accelerator*, 1-4
Oracle JDBC Development Drivers
インストール, 3-5
説明, 1-3
Oracle JVM, 1-4
Oracle *MetaLink* Web サイト

パッチ, 3-7
要件の情報, 2-3
Oracle SQLJ
インストール, 3-5
説明, 1-3
Oracle SQLJ Runtime, 1-5
Oracle SQLJ Translator, 1-5
Oracle Text
提供されるナレッジ・ベース
説明, 1-4
Oracle Text が提供するナレッジ・ベース
インストール, 3-5
Oracle Ultra Search
開始, 4-2
説明, 1-4
デフォルト・スキーマ, 4-2
ポート
範囲とプロトコル, C-3
変更, C-3
Oracle Universal Installer, 3-1
インベントリ, D-2
異なる言語でのコンポーネントの実行, B-3
様々な言語で実行, B-2
実行可能ファイルの場所, A-6
使用するバージョン, 3-2
ソフトウェアの削除, 3-8
ログ・ファイル, D-2
Oracle Universal Installer (OUI)
コマンドラインから実行, A-6
Oracle Workflow
削除, 3-8
パッチのダウンロード, 3-7
ORACLE_HOME 環境変数
Oracle Products インストールのための削除, 3-6
ORACLE_HOSTNAME 環境変数
インストール前に設定, 2-5
説明, 2-4
複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
マルチホーム・コンピュータ, 2-4
Oracle インベントリ・ログ・ファイル, D-2
Oracle ホーム・ディレクトリ
識別, 3-5
マルチホーム, 2-4
Oracle ホスト名、インストール前に設定, 2-5

P

portlist.ini ファイル, C-2

R

readme.txt ファイル, C-2

S

setup.exe, 「Oracle Universal Installer (OUI)」を参照

T

Telnet サービスのサポート, 2-3

W

Windows Telnet サービスのサポート, 2-3

Windows Terminal Server

サポートされないコンポーネント, 2-3

WK_TEST 管理ユーザー名, 4-2

WKPROXY 管理ユーザー名, 4-2

WKSYS 管理ユーザー名, 4-2

あ

アカウント

WK_TEST, 4-2

WKPROXY, 4-2

WKSYS, 4-2

アダプタ、ループバック、「ループバック・アダプタ」、
「ネットワーク・アダプタ」を参照

アップグレード、「パッチ」を参照

い

インストール

DVD ドライブ, 3-3

Oracle Database 10g Products, 3-5

Oracle Internet Directory, vii

一般的な手順, 3-2

画面の非表示, A-6

クイック・インストール, vi

コンピュータの別名、複数, 2-5

サイレント・モードでのエラー処理, D-3

失敗

Companion CD, D-2

説明, 3-2

ソフトウェア, 3-1

バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC), 3-6

非対話モードでのエラー処理, D-3

複数, 3-2

プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC), 3-6

リモート・アクセス・ソフトウェアでのリモート・イ
ンストール, 3-4

リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-3

レスポンス・ファイル, D-3

ログ・ファイル (非対話型インストール), D-3

インストール・タイプ

Oracle Database 10g Products, 1-3

インベントリ・ディレクトリ, D-2

え

エラー

サイレント・モード, D-3

非対話型インストール, D-3

か

環境変数

ORACLE_HOME

Oracle Products インストールのための削除, 3-6

ORACLE_HOSTNAME, 2-4

関連ドキュメント, vii

き

「基本」インストール方法
サイレントまたは非対話型インストール, A-5
記録モード, A-5

く

クイック・インストール, vi

け

言語
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, B-3
様々な言語による Oracle コンポーネントのインストール, B-2

こ

コンフィギュレーション・アシスタント
サイレントまたは非対話型インストール時の非使用, A-6
コンポーネント
異なる言語での使用, B-3

さ

サイレント・モード
エラー処理, D-3
使用する理由, A-3
説明, A-2
「非対話モード」、「レスポンス・ファイル」も参照, A-2
削除
Oracle ソフトウェア, 3-8
ソフトウェア, 3-8
レスポンス・ファイル, 使用, A-7
サポートされないコンポーネント
Windows Terminal Server, 2-3
サンプル・スキーマ, 1-4

し

自動ストレージ管理 (ASM)
サイレントまたは非対話モードのインストール, A-3

せ

セキュリティ
「パスワード」も参照

た

ターミナル サービスのサポート, 2-3

て

ディスク領域要件
Oracle Database 10g Products, 2-2
データベース
Oracle Backup and Recovery を使用したリカバリ, 1-3
データベースのバックアップ

Oracle Database Recovery Manager, 1-3
データベースのリカバリ
Oracle Backup and Recovery, 1-3
データベース要件
Oracle Database 10g Products, 2-2

と

ドキュメント
以前のリリースからの移行およびアップグレード, vii
インストール, 3-5
管理およびチューニング, vii
関連, vii
トラブルシューティング, D-1
Companion CD インストール失敗後のクリーン・アップ, D-2
インベントリ・ログ・ファイル, D-2
ログ・ファイル
Companion CD, D-2

に

認定, ハードウェアおよびソフトウェア, 2-3

ね

ネイティブにコンパイルされた Java ライブラリ
インストール, 3-5
説明, 1-4
ネイティブ・コンパイル Java ライブラリ (NCOMP), 1-4
ネットワーク・アダプタ
複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
プライマリ, 複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
プライマリ・アダプタの決定方法, 2-5
「ループバック・アダプタ」、「プライマリ・ネットワーク・アダプタ」も参照
ネットワーク・カード, 複数, 2-4
ネットワーク・トピック, 2-4
DHCP コンピュータ, 2-4
説明, 2-4
ハード・ドライブからのインストール, 3-2
複数のネットワーク・カード, 2-4
複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
ループバック・アダプタ, 2-5

は

ハード・ドライブからのインストール, 3-2
ハード・ドライブへの DVD のコピー, 3-2
パスワード
レスポンス・ファイルに対する指定, A-2
「セキュリティ」も参照
バックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC), 3-6
パッチ
Oracle Companion CD のためのダウンロード, 3-7

ひ

非対話型インストール
エラー, D-3
非対話モード

エラー処理, D-3
使用する理由, A-3
説明, A-2
「レスポンス・ファイル」、「サイレント・モード」も参照, A-2

ふ

ファイル, Oracle Universal Installer ログ・ファイル, D-2
複数の別名, コンピュータ, 2-5
複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC), 3-6
プライマリ・ネットワーク・アダプタ
決定方法, 2-5
「ループバック・アダプタ」、「ネットワーク・アダプタ」も参照

へ

別名, コンピュータの複数の, 2-5

ほ

ポート
Oracle Ultra Search、範囲とプロトコル, C-3
Oracle Ultra Search、変更, C-3
アクセス URL, C-2
アプリケーション用に構成済, C-2
デフォルトの範囲, C-1
ホスト名、インストール前に設定, 2-5

ま

マルチホーム・コンピュータ, インストール, 2-4

ゆ

ユーザー名
WK_TEST, 4-2
WKPROXY, 4-2
WKSYS, 4-2

よ

要件
Oracle Database 10g Products, 2-2
抑制モード, 「非対話モード」を参照

り

リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-4
リモート・インストール, 3-4
リモート・インストール、DVD ドライブ, 3-3
リリース・ノート, 1-2

る

ループバック・アダプタ
Windows 2003 でのインストール, 2-6, 2-8
Windows XP でのインストール, 2-6
インストール, 2-5
インストールされているかどうかのチェック, 2-6

削除, 2-8
説明, 2-5
必要な場合, 2-5
複数の別名を持つコンピュータ, 2-5
「ネットワーク・アダプタ」、「プライマリ・ネットワーク・アダプタ」も参照

れ

レスポンス・ファイル
Oracle Universal Installer による指定, A-6
一般的な手順, A-3
エラー処理, D-3
記録モード, A-5
コマンドラインで値を渡す, A-2
作成
記録モードの使用, A-5
テンプレートの使用, A-4
自動ストレージ管理 (ASM), A-3
セキュリティ, A-2
説明, A-2
パスワード, A-2
「サイレント・モード」、「非対話モード」も参照, A-2

ろ

ログ・ファイル
Companion CD, D-2
Oracle Universal Installer, D-2
非対話型, D-3